

かみびと わら  
『神人和楽』

愛らしい唐子と勇壮な獅子の共演



稽古の様子  
長崎へやってきた唐人たちの酒宴の様子を愛らしく演じる子どもたち活き活きと立ち上がる2頭の獅子

小川町は、現在のの上町の一部にある、約40世帯の小さな町。年々くんち経験者が少なくなっているそうです。町民のくんちへの意識の薄れを懸念し、昨年8月から小川町集会所にて「くんちセミナー」を開催！！計5回にわたり、諏訪神社の神職をお招きした講話をはじめ、小川町の歴史や平成9年に踊町へ復帰（63年ぶり！）した経緯などの勉強会を行いました。勉強会では、神と人が和やかに楽しむ「神人和楽」が踊町の精神であることを学んだ町内の皆さん。楽しみながら今年の奉納踊に臨みます。



唐子獅子踊  
からこししおど

小川町  
こがわまち

【知っトク情報！！】

中尾獅子浮立と唐子踊保存会『第38回伝統文化ポラ賞・地域賞』受賞★

（国の貴重な伝統文化に貢献し、地域で長年努力され、後進の指導・育成にも努めている個人または団体に贈られる賞）

小川町の唐子獅子踊は、小川町の子どもたちが演じる「唐子踊」と中尾地区の「中尾

ん 哀愁をおびた旋律で魅了する囃子方のみなさ



演者の皆さんが、いかに踊りやすく、気持ちよく奉納できるかを第一に考え演奏しています。今も昔も裏方としてくんちを盛り上げていきたいと思

左：中尾獅子浮立と唐子踊保存会囃子方頭領 永田義浩さん  
右：長崎シャギリ組合中尾地区頭領 樋口輝人さん



シャギリの稽古の様子  
笛は手作りだそうです。演奏だけでなく、

「シャギリ」についてQ&A！！

- Q 「シャギリ」とは？
- A 笛と締太鼓が奏でる「長崎くんち奉納音曲」のこと。奉納するとき、踊町が移動するときなどあらゆる場面で演奏されるため、踊町の奉納には欠かせないものです。
- Q 小川町のシャギリは誰が演奏しますか？
- A 中尾獅子浮立と唐子踊保存会の囃子方が演奏しています。
- Q 何歳くらいから稽古を始めますか？
- A 小学4・5年生から締太鼓、中学生から笛の稽古を積んでいます。今年は高校1年生（笛）が2人デビューします！！

平成三十年度  
くんち瓦版 第2号  
長崎くんちの舞台裏

発行：平成30年8月17日  
長崎市地域支援室（中央地域センター内）  
長崎市桜町2番22号 電話829-14

本格的な夏を迎え、踊町の本番に向けた稽古も一段と気合が入ります。くんち瓦版第2号では、くんちを通して地域を支える人々やくんちを通じた人々のつながりをご紹介します。

- ～今回ご紹介するくんちを支える人たち～
- 1 本古川町  
名物おばちやまと青年団
  - 2 紺屋町  
必見！！「伝承したい長崎の技」
  - 3 小川町

轟々しく大海を航海する美しき御座船  
演者を支える大正生まれの名物おばちやまと本古川町青年団の根曳衆



本古川町  
もとふるかわまち



前列左から鮫島美香さん、黒瀬勝子さん、高松百合子さん  
後列中央：青年団長で長采を務める田代直樹さん。  
とてもアットホームな雰囲気です

御年95歳の黒瀬さんは生まれも育ちも本古川町。お父様がくんちに関わる姿を見て、ご自身も自然と携わるようになったそうです。婦人部や根曳の方々にはテキパキと指示を出され、様々な相談にも対応されています。今なお現役でご活躍されている本古川町自慢のおばちやまで

【知っトク情報！！】  
本古川町の御座船は昭和29年に建造した総檜作りの和船。船の胴体は、現在では手に入らない貴重な大きな檜の一枚板を上下に一枚ずつ組み合わせ合わせたもの。とて

～根曳衆の結束力～  
根曳衆は本古川町自治会青年団に所属します。日々の稽古のほか、采など小道具の製作、また、稽古後の食事の準備も青年団が担当します。約7カ月間、稽古から食事までを共にして信頼関係が築かれ結束力が高まっていくそうです。「スピード パワー 気迫」が信条という根曳衆の躍動感あふれる船まわし。必見です！！  
☆小屋入り前日、根曳衆が揃って頭を丸めるのは気合の印、今回で3回目。伝統になりつつあります！



HPでも「くんち情報」を発信しています。ぜひ、ご覧ください！！  
長崎市 中央地域 くんち 検索 ← クリック  
(http://www.city.nagasaki.lg.jp/shimin/121100/121100/p031293.html)

紺屋町  
こうやまち



本踊  
ほんおどり

伝承したい  
長崎の技☆

# あでやかな本踊を支える 踊りや地方の師匠、傘鉾を手掛ける職人が 住む紺屋町

紺屋町は、現在の諏訪町と麴屋町の町境に位置しており、江戸時代はじめに染物職人（紺屋）が多く集まってできた町。昭和41年の町界町名変更で町名としてはなくなりましたが、くんちの奉納は紺屋町として続いています。わずか70世帯ほどの小さな町内に、踊りや地方の師匠、傘鉾を手掛ける職人が居住しており、町内の住民でくんちの準備から本番までを完結させているのが紺屋町の特

紺屋町のくんちを支える御三方へインタビュー



左から北村直樹さん、  
杵屋佐都茂師匠、藤間金彌師匠、  
近所さんの間柄  
です！

## ☆傘鉾を手掛ける紺屋町の職人 彫美堂 北村直樹さん



傘と心棒の接合部分を調整する北村さん

北村さんは、職人として傘鉾の調製を手掛け、住民として庭先調べなどに関わり、紺屋通り自治会の青年部長としても地域で活躍しています。  
Q：普段は何を製作していますか？  
A：彫美堂は、父が紺屋町で開業した彫刻屋。普段は欄間や表札、看板を主に製作しています。  
Q：くんちに関わるようになったのは？  
A：高校1年生の時、父が麴屋町の川船の上の鯉の製作と万屋町の傘鉾の新調をしてからです。父の技を見て盗みながら修業を積み、今は自分の技を追求しています。  
Q：今年手掛ける傘鉾は？  
A：紺屋町、東古川町、本古川町の傘鉾を調製します。  
Q：北村さんにとって「くんち」とは？」

## ☆地方（三味線・唄）指導 杵屋佐都茂師匠

杵屋師匠は、生まれも育ちも紺屋町。昭和20年、終戦直前の4月、紺屋町の家屋は空襲による火災を防ぐため、多くが取り壊されたそうです。戦前の紺屋町の雅な雰囲気を今に伝える杵屋師匠です。  
Q：くんちに初めて出演されたのは？  
A：昭和8年頃、4歳の時に川船の先曳で出演しました。  
Q：終戦後のくんちはどんな雰囲気でしたか？  
A：昭和21年、検番の師匠方が神様に奉納したいとの思いで本踊を奉納し、私も長唄で出演しました。混乱を極めた中、演者たちの想いが爆発するかのように稽古に打ち込んだのを覚えています。  
Q：杵屋師匠にとって「くんち」とは？  
A：「くんちは神様への奉納」この本筋を忘れてはならないとの思いを持ちつづけた

【知ったク情報！！】  
紺屋町の演し物  
と言えば「本踊」  
ですが、戦前は、  
「川船」や「曳  
壇尻」を奉納し



右：杵屋師匠  
4歳の時



とても和やかな雰囲気で行う庭先調べを行う紺屋町のみなさん。正帳面方の達木正則さん（上段左から3番目）と岩永和寿さん（上段右端）

## ☆『庭先調べ』は昨年末か

庭先調べとは・・・庭先まわり（踊町が各場所での奉納のあと、店舗や家々に演技を呈上してまわること）の順路を決めていく下調べの作業のことです。  
◇H29年12月～ 綿密な順路計画を練るための話し合い  
◇H30年3月～ 2組に分かれ実地調査2,800カ所から3,000カ所もの店舗等を確認  
◇H30年7月～ 庭先まわりの先頭に立つ正帳面方（せいちょうめんかた：庭先まわりの責任者）を加え机上で順路決め  
◇H30年8月～ 実地調査を繰り返す

## ☆自治会の活動も盛んで

子どもからお年寄りまで地域ぐるみで活動をしています。小さい自治会ながら、くんちを通して生まれた絆や信頼が日頃からの自治会の活動につながっています。  
～主な活動～  
青銅塔（からかねとう：町内の人が本河内に建てた水害被害者の供養塔）の清



約10ヶ月かけて庭先まわりのルートを書いた「正帳面」が完成します。



子どもたちへの指導の様子

神様にまっすぐな気持ちを持って踊って欲しいと願う金彌師匠。

## ☆舞踊振付指導 藤栄会 藤間金彌師匠

3代目藤間金彌師匠は、お膝元の紺屋町をはじめ、元船町、鍛冶屋町、築町、桶屋町などの本踊の指導を行っています。  
Q：稽古中の雰囲気はいかがですか？  
A：2～12歳と幅広い年齢の子どもたち約15人が出演予定です。子ども同士が仲良くなることで大人同士も顔見知りになり、町内のコミュニケーションが向上しています。  
Q：指導されるときに気にかけていることはありますか？  
A：町の代表として神様に奉納できることを芯に置いて、子どもたちには参加できる喜び、ワクワク感と緊張感を持って臨んでほしいといつも話しています。  
Q：金彌師匠にとって「くんち」とは？  
A：長崎の守へアノダマス氏師匠へ感謝



ばん 伴コトさん  
(初代藤間金彌の母)

明治中期から昭和初期まで約40年もの間、歌舞伎仕込みの演出でくんちの本踊の振付指導をしました。伝統は代々受け継がれています。